空を飛ぶ蜘蛛を見たことがありますか？

坂上楠生画『雪迎え』（第360回）

2003年　文藝春秋

Story

蜘蛛が空へ飛んでいくその場所で10年後に待っています、と書かれた手紙を突然見知らぬ少年から渡された22歳の氷見留美子は、10年の歳月を経て、忘れていた手紙を再び目にする。留美子の隣人上原桂二郎は、義父から昔の約束を果たすための人探しを依頼される。

留美子と桂二郎、二人の主人公の視点が変化する構成は、魅力的な登場人物たちをより鮮やかに、物語をより華やかにひきたてている。出会いと別れの中で、はたしてそれぞれの約束は果たされるのか。

2004年 第54回芸術選奨文部科学大臣賞文学部門受賞作

【産経新聞2000年10月～2001年10月連載】

さし絵を担当された坂上楠生氏の言葉

「花の降る午後」から15年が経っている。時代は変わり、パソコンとインターネットが一般化し始めた時代であった。

私にとって三回目となる「約束の冬」でも、モチーフの中にケイタイ、パソコン、メール、インターネットが新たに加わった。

このことに関してのエピソードは宮本輝さんのエッセー集「血の騒ぎを開け」の「人は言葉の生き物」の中に詳しく述べられている。

作画的には「人間の幸福」の延長線と考えてよい。

この連載中の特徴は、輝さんのファンサイトの（テルニスト）や宮本輝公式サイトの（BTC）から、リアルタイムで輝さんのファンの方々から、私のホームページの掲示板に、感想やメッセージを寄せて下さった事である。これらのエールには何度も力づけられ、今でも心より感謝している。

空飛ぶ蜘蛛と雪迎え

物語の重要なテーマをなす空飛ぶ蜘蛛は、この現象がおこると雪の季節がやってくることから、東北地方では「雪迎え」と呼ばれている。

「雪迎えって言葉を知ってるか？蜘蛛が空を飛ぶんだ。小さな蜘蛛が自分の吐き出した糸を使ってね。するとその二、三日あとに雪が降る。だから雪迎えっていうそうだ」（中略）

「はい。風と上昇気流に乗って、見事に飛んでいくんです。糸が銀色に光って、すごくきれいなんです」（最終章より）

この会話は「雪迎え」を見てみたいと思わせる。

「冬が来る直前に、自分が吐き出したか細い糸を使って空高く飛ぼうとする蜘蛛の懸命な営みの姿」や「この蜘蛛たちに幸運な飛翔をもたらす大自然の慈愛に似た何物か」というあとがきの言葉に表される自然の強さが著者の心を捉えたように、強く懸命に生きる魅力的な人々が紡ぐ物語である。

今、ここにいることを10年前に想像できましたか。

10年。たったの10年。でも長い長い10年。人によって時間の感覚はそれぞれ違うもの。楽しい時間は早く、苦しい時間は長く感じてしまいますよね。

10年という単位で自分の人生を振りかえったり、想像してみたり、なにか新しい発見があるかもしれません。

Review